『古学思問』

――鈴木朖の万葉集覚書――

片山　武

一

墨付六枚の万葉研究覚書ともいえる『古学思問』[注(1)]を紹介するのであるが、その前に『日本古典文学大辞典』[注(2)]に尾崎知光氏が「鈴木朖」について執筆されているのでその紹介からはじめる。

鈴木朖（すずきあきら）　国学者。朖は名。幼名は恒吉。通称は常介、字は叔清。離屋（はなれや）[注(3)]と号す。尾張国春日井郡下小田井村（名古屋市外西枇杷島町）山田重蔵の三男。祖父の鈴木家を継ぎ、尾張藩に仕え、七十歳で明倫堂教授並となり、国学を講じた。宝暦十四年（一七六四）三月三日出生、天保八年（一八三七）六月六日没、七十四歳〈墓碑銘〉。墓は名古屋市千種区平和公園誓願寺墓域にある。〔事蹟〕少にして丹羽謝庵・市川鶴鳴に漢学を学び、十五歳でその名が『張城人物誌』に載る秀才であったが、本居宣長の著書を見て傾倒し、寛政四年（一七九二）には「送本居先生序」を呈し、その年、二十九歳で入門した。享和元年（一八〇一）に宣長に送った「活語トマリ文字ノ説」を補訂拡充し、同三年ごろに『活語断続譜』『言語四種論（げんぎょしゅろん）』『雅語音声考』を著した。……宣長の死後、本居春庭の門人となり、尾張国学の中心的存在として、『玉の小櫛補遺』『雅語訳解』『少女巻抄註』を著し、古典の教授につとめたが、漢籍に関して、『大学参解』『論語参解』をも著し、和漢を総合した学問論『離屋学訓』や『養生要論』『離屋集』のような書まで残したスケールの大きい学者であった。

尾崎氏の解説の中で「寛政四年（一七九二）「送本居先

生序」を呈し、その年宣長に入門二十九歳」とあり、宣長はこの年六十三歳である。

寛政六年（一七九四）四月に名古屋にこられ、二二日帰途につき、二六日に帰られる。「日記六」[注(4)]には

○廿二日發　名兒屋、今夕泊　木田村大舘高門宅　○廿三日　木田逗留、大舘氏老母六十賀會　○廿四日泊四日市　○廿五日津小西氏　○廿六日歸著

とある。

朖は宣長とともに、松坂に滞在し、宣長の書入れ本（万葉集）を丁寧に写している。これを見ても朖が万葉集に対して興味と関心をもっていたかがわかる。これらについては尾崎氏が「文莫」第七号[注(5)]で述べられている。

二

本項では『古學思問』について述べることにする。本書は大久保正氏が『本居宣長の萬葉學』[注(6)]でも述べられているし、尾崎氏も「文莫」第七号で紹介せられてはいるが、お二方とも『古學思問』をごらんになってはいない。『國語と國文學』により紹介されているのである。ここでは成瀬一三氏の「鈴木離屋の萬葉集覺書」をもとに紹介したく思うのである。氏は『古學思問』の項目で

『古學思問』といふものは、墨付僅かに六枚、たつた二十二項の萬葉歌についての覺書に過ぎないが、尾府鈴門の秀才離屋鈴木朖の自筆稿本といふ意味で興味あるものに思つてゐた。…その内容は少くとも離屋の國語學史上の地位を恥かしめないものであつた。…この稿本は離屋関係の書を殆ど取揃へてゐる名古屋市立圖書館[注(7)]蔵する所の「離屋雜記」といふ小冊の一部である。…第一に小冊子の體裁より見て「乙卯東行雜」や「江戸萬覺」の東行と大差なき頃の覺書かと思はれるが、はつきり斷言は出來ない。この乙卯は寛政七年、離屋時に三十二歳の壯時、彼が本居門に入つて、四年目の年であつた。第二に、本文中所々に後の自筆で註記して、「鈴屋翁云此説甚ヨシ」、「先生コレヲウベナハレタリ」などと言つてゐる。〈先生とは本居宣長を指す〉…これらの所見は、宣長の歿した享和元年以前に作られてゐなければならない道理……内容は全くの覺書式のもので、引用書も「玉の小琴」[注(8)]が主で、時々「萬葉考」[注(9)]が引合に出るのみ、他の書、他の説にはつひに言ひ及んでいない。

と述べられ、朖説の一、二をあげ紹介せられている。それを追って検討してみたく思う。

三山歌　として以下のように述べられている。

十一丁　香具山ト與耳梨山與相之時（アヒシ）

播摩風土記[注(10)]ノ文ニヨルニ。相（アフ）トハ相合ノ事ニアラズ。相闘ノ義也。然ラハ香山ヲ女山ト云ハアヤ

マリニテ。耳梨トトモニ男山。畝火ハ女山　□ンカ。サレバ長歌ノウネヒ雄男志等ハ。ウネビ山ヲバ可愛ト思テト云心トスベシ。雄男ノ字ハタヾ假リ文字也。又ハ早ク此レヲ書シトキヨリ心得チガヘタルニテモアラン

というのが朄の説である。

①巻一・二三番歌は次のごとくである。

中大兄近江宮に天の下治めたまひし天皇の三山の歌一首 注(11)

香具山は　畝傍雄雄しと　耳梨と　相争ひき　神代より
かくにあるらし　古も　然にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき（①一三）

高山波　雲根火雄雄志等　耳梨与　相諍競伎　神代従如此尓有良之　古昔母　然尓有許曽　虚蟬毛　嬬乎相挌良思吉

香具山は　畝傍山を　雄々しく思って　耳梨山と　いさかった　神代の昔からして　こうであるらしい　古も　そうだったからこそ　今の世の人も　妻を　奪いあって　争うらしい

反　歌

香具山と　耳梨山と　あひし時　立ちて見に来し　印南国原（①一四）

高山与　耳梨山与　相之時　立見尓来之　伊奈美国波良

香具山と　耳梨山とが　いさかいした時　阿菩の大神が　わざわざ見に来た　印南野なのだなここは　わたつみの　豊旗雲に　入日見し　今夜の月夜　さやけかりこそ（①一五）

渡津海乃　豊旗雲尓　伊理比弥之　今夜乃月夜　清明己曽

大海原の　豊旗雲に　入日を見たその　今夜の月は　清く明るくあってほしい

朄は①一三で香具山と耳梨山を男山とし、畝傍山を女山とする。

伊藤博氏は　朄と同意見で『萬葉集全注』注(12)で以下のごとく説明している。

○畝傍を惜しと、「を惜し」に関しては、原文の文字「雄男志」を重んじて「雄々し」と解き、香具山を女山、畝傍・耳成を男山と見る説もある（仙覚抄、注釈など）。しかし、名詞＋形容詞の語法の場合、形容詞の上に助詞「を」を必要とするのが古代の習い（5・八九三、10・二三〇三など）。「雄」を助詞に用いた例は、一七、6・九三五、13・三三三三など。「惜し」は古代にごくありふれた語で、「惜しと」の形は、「散りなば惜常」（8・一五八一）の例がある。香具山（男）と畝傍山（女）とがねんごろにしていたのに、耳成山（男）

が手を出して畝傍に懸想した、畝傍も耳成に傾いた、それ故、香具山は耳成と争った、という背景のもとに「畝傍を惜しと」がある。一方、「畝傍雄々し」の立場から、畝傍を男山、香具と耳成とを女山と見る説もある（口訳万葉集）。しかし、古代のツマ争い伝説では二人の男が一人の女を争うのが型になっており、従いがたい。

伊藤氏と朖とは見解を同じうする。

阿蘇瑞枝氏は『萬葉集全歌講義』（巻第一・巻第二）注(13)で〔三山の性別に関する諸説〕として、次のようにまとめておられる。

（香）（畝）（耳）

① 女　男　男（仙覚抄・代匠記・僻案抄・万葉考・略解・大濱厳比古「高山波雲根火雄男志等」・注釈・全訳注・新全集・和歌大系など）

② 男　女　男（墨縄・古義・全釈・総釈・窪田評釈・全註釈・佐佐木評釈・全集・集成・全注・釈注・新大系など）

③ 女　男　女（折口口訳・大系など）

④ 男　男　男（私注―別の女を争う）

以上伊藤氏の説明もあり、たぶん真淵の『万葉考』の説にしたがったのではないかと思い、私は①説にしたがっておきたい。

皮爲酢寸

二十五ォ　皮爲酢寸云々（三〇七）

玉小琴説可疑、ハタス、キハ下句三穂ノ枕詞トミユルニ、若三十三丁シヅノ石屋ト取カヘテハ枕詞ツヽカズ、可レコト疑一也、此次ノ二首住ケル人（三〇八）又昔ノ人（三〇九）乎ナド大汝少彦名ノ神ノ事ヲモサ云マジキニハアラネド、何トヤランイカヽニ思ハル、可レ疑事ニ、此歌ノ末ノ句ミレドアカヌカモハ、次ノ二首ノ心ニ取合セテミルニゲニサアルベクキコエ、後ノ幾代ヘニケンハ大汝ノ神代ノ事ニハ殊ニ宜シク覺ユ、可疑事三也

朖は師の『玉の小琴』の説を吟味しながらもしりぞけ、「皮爲酢寸」は「三穂」に係る枕詞とした。成瀬氏は本居も「古事記伝」に於いて自身の旧説を改め、朖と同じ見方をしていることを示し、それに対して「師弟奇妙の暗合をなしてゐる」と記している。

巻三・三〇七蕃歌は

はだすすき　久米の若子が　いましける　一に云ふ「けむ」
三穂の岩屋は　見れど飽かぬかも（一に云ふ「荒れにけるかも」）
皮爲酢寸　久米能若子我　伊座家留（一云家牟）　三穂乃石室者　雖レ見不レ飽鴨（一云、安礼尓家留可毛）

（はだすすき）久米の若子が　いたという（また「いたらしい」）
三穂の岩屋は見ても飽きない（また「荒れてしまった」）

頭注に、はだすすき―類似語形にハタススキ（四五）がある。ここは枕詞として用いてあるが、久米にかかるとも三穂にかかるともいわれ、かかり方も未詳。とある。西宮一民氏は『萬葉集全注　巻第三』[注14]二〇七

［注］　はだすすき　の項で「…『冠辞考』に「久米といへるも皮に籠る意にてつゞけしものとすべし」と説き、『攷証』に「薄は、穂に出ぬまへは、穂の隠たるものなれば、隠といふべきを、こを、くにかよはせて、くめとつゞけたるなり」と述べているのが正しいと考える。私はさらにそれを補強して、「旗すすき」（旗のように穂が靡く薄）は「幡荻、穂に出づる吾や」（神功前紀）「波多須々支、穂振別けて」（出雲国風土記、意宇郡）の如く、これはその出た穂に着目した枕詞であるのに対して、ハダススキの方は、「穂には開き出ず」（10・二二八三）「穂には開き出ぬ」（10・二三一一）の如く、穂には出ないさまを修飾する譬喩的枕詞であるから、それに準じて、「籠る」から「久米」にかかる枕詞とみることができると説いた。……。実際に薄の皮をかぶって穂に出ぬ直前の姿を観察すれば納得がいくと思う。……」

以上「冠辞考」「攷証」西宮氏の考察から、「はたすすき」は」「久米」にかかる枕詞と考えるのがよいかと思われる。ちなみに万葉集の「はだすすき」の例を見るに（新編日本古典文学全集による〔　〕は頭注）

(1)　者田為〻寸　穂にはな出でそと…（⑯三八〇〇）
（はだすすき）出しゃばるまいと）
〔○はだすすき―三九五七。ここは穂ニ出ヅの枕詞〕

(2)　旗須為寸　篠を押しなべ（①四五）
（すすきの穂や　小竹を押し伏せて）
〔○はたすすき―穂が旗のようになびいているすすき〕

(3)　旗芒　本葉もそよに（⑩二〇八九）
（はたすすきの　本葉までそよがして）
〔○はたすすき―穂が旗のなびいているように見える秋のすすき〕

(4)　波太須殊寸尾花逆葺（⑧一六三七）
（はだすすき）尾花を逆さに葺き）
〔○はだすすき―一六〇一。ここではヲバナと同じものをさし、同格でかかる枕詞として用いている〕

(5)　はだすすき（皮須為寸）　穂に出づる秋の（⑧一六〇一）
（花すすきが　穂に出る秋の）
〔○はだすすき―未詳。ハタススキという類似語もあり、後にはハナススキという語も現れる。〕

(6)　はだすすき（皮為酢寸）　穂には咲き出でず（⑩二二八三）
（すすきでもないのに　人目につかないように）

〔○はだすすき―未詳。穂ニ出ヅを起す序〕

(7)　はだすすき（波太須洒伎）　穂に出し君が（⑭三五〇六）

（はだすすき）仲を知られた君が）

〔○はだすすき―未詳〕

(8)　はだすすき（波太須洒伎）　浦野の山に（⑭三五六五）

（はだすすき）浦野の山に）

〔○はだすすき―未詳。ここはその穂先の意のウラと同音の浦にかけた枕詞〕

(9)　はだすすき（波太須洒吉）　穂に出づる秋の（⑰三九五七）

（はだすすきが　穂に出る秋の）

〔○はだすすき―ススキの花穂をいうか。ハタススキとの違いなど不明。…〕

(10)　皮為酢寸、穂には咲き出ぬ（⑩二三一一）

（はだすすき）人目を忍ぶ）

〔○はだすすき―未詳。穂ニ咲キ出ヅの枕詞〕

以上は「はた（だ）すすき」とよめるものが『萬葉集總索引』[注15]によるに十例みられる。

ただ朖は「皮爲酢寸」（③三〇七）とのみ提出、ふりがなをつけていない。『總索引』中の「田」は清音文字、「太」は濁音文字として使用せられている。「はた」「はだ」のちがいについてもはっきりしていない。朖は説明の中で枕詞云々についてももう一つはっきりことわっていない。私は説明の中で『冠辞考』『攷証』、西宮氏の説から「久米」の枕詞説をいちおう考えてみたが、後考にまちたい。

命ヲ惜ミ

空蟬之命ヲ惜ミ云々（①二四）

此命を惜ミハ常ニサイフトハ少シ意異ナリ、カノ苦ヲアラミ、風早ミナト云カ如ク命ノ惜サニトイフ心ナリ、サレドカヤウニミズシテモ意ハ猶大カタオナシクテキコユルニ（「意ハキコユルヤウナルハ」[注16]）ツケテオモフニ、コノ二ツモトヨリ同シ言バナルベシ、サルハカノ瀬ヲハヤミナトノ類ハ、ヤヽ意エカタキヤウナレド（コヽトハ人ト物トノカハリアリテヤヽ轉ジタルモノナル故ニ、コノ心ニテハ意エカタキヤウナレド）コレモタトヘハ波ナトヲ心アル物トシテイハヽ、波ノ岩ヲ打ハモハラ風ノ早キニ得タヘヌニヨルナレハ、麻績王ノ命ノ惜キニエタヘタマハズシテ、玉藻ヲ刈玉ト大カタ同シ意也（全ク同シ意ナリ）然レハ瀬ヲハヤガリ、命ヲ惜ガリト云コト、シテキコユルナリ、コノ事岡部大人ノ（岡部ノ翁ノ）説もアリシカドサラニキコエヌ事ナリケリ

寛政六年四月宣長が名古屋にこられた時、帰られる宣長と共に松坂に滞在し、朖は万葉集など宣長の書入れをその

まま写して持ち帰った。

現在国立国会図書館所蔵の『萬葉和歌集』[注17]中に十五丁の前の別紙とじこみがあり、それは「万葉一空蝉之命乎惜美云々」（①二四番歌）とあり、『古学思問』の文章と同じものであるが所々なおしたものを「右御裁判奉願上候」と手紙の形で宣長に質問をしている。それに対して「此御説此御考ヘノ如シ本ハ一ツ言也」と宣長の見解が見られる。手紙の本文中「瀬ヲ」「瀬」を消し「風」になおしている。これは宣長の字で消して風と書いたか今のところ私にはわからない。

朖は「命ヲ惜ミ」は「命を惜しがり」と解釈する。成瀬氏は富士谷御杖[注18]の『萬葉集燈』富士谷成章の『あゆひ抄』を引き朖説を補強される。また山田孝雄氏の『萬葉集講義』説にやゝ疑問を呈示され、「…然し言葉の原の意の解釋としては充分考慮さるべき興味ある一説と信ずる。」としておられる。

現在では橋本四郎氏、木下正俊氏らの説[注19]により、ミ語法と呼ばれる。

うつせみの命乎惜美（命ガ惜シイノデ）波に濡れ伊良虞の島の玉藻刈り食む（①二四）春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野乎奈都可之美（野ガナツカシイノデ）一夜寝にける（⑧・一四二四）

とされている。

『古学思問』は七項目示されているが、三項目とりあげ検討した。残りの問題はのちほど考察することにしたい。

注（1）「鈴木離屋の萬葉集覺書」成瀬一三氏、「國語と國文學」第十四巻第九號（昭和一二年九月號）

注（2）『日本古典文学大辞典　簡約版』一九八六・一二　岩波書店刊

注（3）「解釈」平成一三・九・十月号（平成一三・一〇・一刊　解釈学会編）この号に「文学館めぐり」118　離屋会館―国学者鈴木朖研究とともに―」と題して私が執筆している。主な項目に「鈴木朖とその系譜」鈴木家系譜

コヨ
＝
重房 ― 朖 ― 広業 ― ヤヨ ― 林之丞 ― 清 ― 俔（昭59・1没）― 善博（当主）
＝
巌

朖の著作

鈴木朖学会

昭和五〇・六・七「鈴木朖記念研究会」が離屋会館にて行なわれ、当日「鈴木朖学会が成立。以後同会館にて毎年講演会を開催（学会は鈴木朖の研究と普及ということで、毎年朖の命日に近い〈六月八日〉土曜日に行われ、昭和五十年杉浦豊治氏、昭和五一年足立巻一氏、酒井秀夫氏、昭和五二年安藤直太朗氏・松村博司氏と行なわれた。また学会誌「文莫」。（論語述而篇の「文莫吾猶人也」からの命名）を昭和五一年から刊行。

注（4）『本居宣長全集第十六巻』昭和四九・一二　筑摩書房刊。

注（5）「鈴木朖書入『萬葉和歌集』について尾崎知光氏（「文莫」

第七号　昭和五一・六・一　刊。

注(6)　『本居宣長の萬葉學』大久保正氏著　昭和二二・九　大八洲出版刊。

注(7)　現在の名古屋市鶴舞中央図書館先代のご当主によると朖関係の書籍は名古屋市立図書館に疎開していたが、第二次大戦の折、焼失したとのことである。『古學思問』もこの時焼けたものと思われる。それ以前だったので成瀬氏は調査されていたと思われる。

注(8)　注(2)参照。

注(9)　同右。

注(10)　『新編日本古典文学全集5　風土記』校注・訳者―板垣節也氏　一九九七・一〇　小学館刊　「播磨国風土記　賀古の郡」○…百姓飲めば、すなはち酔ひて相闘（たたか）（即酔相闘相乱）ひ相乱（みだ）しき。…（…庶民が飲むとかならず酔って争いあい村を乱した。…二九ページ　○…石作の連等、奪はむとして相闘（たたか）ふ。（…此処石作連等、為レ奪相闘。）（石作の連らが蔣（まこも）を奪おうとして闘いあった。三七ページ）これらの例から『播磨国風土記』（賀古の郡）では「相」をよんでいない。

注(11)　『新編日本古典文学全集6　萬葉集①』校注・訳者　小島憲之氏　木下正俊氏　東野治之氏　一九九四・五　小学館刊　により書き下し文、原文、口語訳も本書によった。頭注を引用した場合も本書によった。

注(12)　『萬葉集全注　巻第一』伊藤博氏著　昭和五八・九　有斐閣刊

注(13)　『萬葉集全歌講義（巻第一・巻第二）第一巻』阿蘇瑞枝氏著　二〇〇六・三　笠間書院刊

注(14)　『萬葉集全注　巻第三』西宮一民氏著　昭和五九・三　有斐閣刊

注(15)　『萬葉集總索引』單語篇　正宗敦夫氏編著　一九七四・五　初版第一刷　一九八三・九　初版第四刷　平凡社刊

注(16)　『古學思問』に書かれたものが初稿で宣長に手紙で質問したものが再稿かと思われたが何度も訂正したかもしれない。

注(17)　寛政六年宣長が名古屋に来られ帰られる時に宣長とともに松坂に滞在、万葉集を宣長の写したものそのまま写し持ち帰っている。鈴木家の先代のご当主が朖の写した万葉和歌集は焼失したといわれた。ということは朖の写した万葉和歌集それが誰か弟子の手に渡り弟子が朖の本を忠実に写した。それが現在国会図書館に所蔵せられている。先代ご当主がおそらく国会図書館蔵本を複写せられたものが現在離屋会館蔵本なのではなかろうか。

注(18)　注(2)参照。

注(19)　坂本信幸氏、毛利正守氏編『万葉事始』一九九五・三　初版第一刷、一九九七・三　初版第三刷　和泉書院刊　中の「語法」の項目で「ミ語法」として説明せられている。

本稿は平成三一年三月二〇日「あいち国文の会」で発表させていただいたものを中心にまとめたものである。中途半端なものになってしまったが後稿をまつことにする。当日ご指導たまわった方にあつく御礼申しあげるものである。「文学碑めぐり」などはご当主鈴木嘉博氏、順子氏にご指導たまわったものであつく御礼申しあげるものである。なおご質問その他は

〒四五一―〇〇三一　名古屋市西区城西三―二一―一七
離屋会館　鈴木朖学会にご連絡いただくとよい。

（かたやま　たけし）